

Title	ウィトゲンシュタインと行動主義
Author(s)	中谷, 隆雄
Citation	メタフシカ. 1999, 30, p. 127-139
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/66623">https://doi.org/10.18910/66623</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## ワイトゲンシュタインと行動主義

中 谷 隆 雄

### 一 行動主義

小論で考察してみたいのは二点である。ワイトゲンシュタインは行動主義に同意しないが、それはどういう理由によるのか、というのが第一点。そして、彼は行動主義に反対しながら、行動主義が批判した心身二元論に舞い戻らなかったが、そのことはどうして可能だったのか、というのが第二点である。

ただ行動主義といっても多義的なので、その意味を限定しておかなくてはならない。行動主義というのは、①方法論的行動主義、②形而上学的行動主義、③論理的行動主義の三つに分かれるであろう (Block 55)。

① 方法論的行動主義というのは、心的事象は相互主観的に到達不能であるという仮説に基づく科学方法論である。この方法論に従えば、心理学の仕事は心的事象を、直接的にはな

く、行動を介して間接的に探究することになる。このタイプの行動主義は、効率的に科学的成果を得るための方法論であって、哲学的な見解ではない。

② 形而上学的行動主義というのは、心的事象が存在することを否定する立場である。これは、いわば存在論の見解である。

③ 論理的行動主義というのは、心的事象についての言明は行動傾向についての言明に還元できるという主張である。

小論では、考察をワイトゲンシュタインと形而上学的行動主義の關係に絞りたい。なぜなら、彼が自らの思想を練り上げる際に意識していたのは、概して、形而上学的行動主義であったように思えるからである。そこで、以下、「行動主義」で形而上学的行動主義のみを意味することにする。

## 二 内的と外的

行動主義は、人間に生じる事象について、外的なものの実在は認めるが、内的なものの実在を認めない。そして外的なものとは行動であり、内的なものとは心的事象である。つまり、行動主義は、行動の実在のみを認め、心的事象の実在を認めない。誰がこういう行動主義を支持していたかはここでは問題にはしない。また小論にはそれを論じる用意もない。考えてみたいのは、ワイトゲンシュタインがこういう行動主義を意識していたと仮定すれば、彼の言説がよりよく理解できるのではないかということである。

ワイトゲンシュタインは行動主義に同意しない。しかしその理由は、心的事象の実在が認められるということではない。心的事象の実在については、彼は認めてもいないし、また否定してもいない (PI 308)<sup>1</sup>。彼が行動主義に同意しないのは、簡単に言えば、行動主義と概念枠組みを共有しないからである。

行動主義の概念枠組みというのは、ある種の二分法のことである。この二分法は心身二元論に由来する。心身二元論は、存在を外的存在たる身体的事象と内的存在たる心的事象に峻別していた。そして心身二元論に対する批判の結果、一方で観念論や現象論が生まれ、他方で行動主義や物質論が生まれた。しかし、これらの立場はいずれも、「内的—外的」の区分の一方を

問題にしているだけで、二分法そのものを問題にしていない」(Glock 175)。

ワイトゲンシュタインによれば、「内的—外的」という二分法は比喩にすぎない。例えば、痛みがあることと、痛みなしに痛みをよそおうことの間には、「内的な区別がある」と言われることがある。そのように言われるときの「内的」は、比喩であって、しかも「危険な比喩」である (BPI 82A)。「内的」という表現がなぜ「危険」なのか。

「内的—外的」というのは、元来、空間的な概念であった。もちろん、空間的な「内的—外的」が人間に生じる事象に比喩的に使用されてよい。しかし、彼によれば、「内的—外的」の比喩的な使用から次のように考えられてしまうのが「危険」なのである。つまり、私と他人の間には「障壁」が存在し、「障壁」を隔てて私側が「内」であり、他人側が「外」である。そして、個々人は自分自身の心に対しては特権的に到達できるが、他人の心に対しては到達できない、と。だが、そのように考える根拠はない。

たしかに、私は私の考えを隠すことができる。そして、私の考えが隠されうるといふ事実から、私の特権的な内的世界の存在が正当化されると考えられるかもしれない。しかし、「もし私が話して、そして他のすべての者が聾であったとすれば」、「私の考えは隠されているのではないか (BPI 57A)」。あるいは、

もし私がフランス語を話して、周囲の者がフランス語を理解しなければ、私の考えは隠されているのではないか。だからといって、そのような場合、乗り越え不能な「障壁」によって私の内的世界が形成されると考えられることはない。

それでも、私が私の考えについて完全に黙して語らなければどうか。このような事態は事情が異なると考えられるかもしれない。つまり、もし私の考えがまったく表明されないとすれば、そこには乗り越え不能な「障壁」があると考えられるかもしれない。この事態は(a)(b)の二つのケースに分けることができる。

(a) 私は、私の考えを表明することが可能だけでも、あえてそれを隠している。

(b) 私は、私の考えを表明することがまったく不可能である。

(a)については問題ない。私が私の考えを表明することが可能であるとするなら、「障壁」を乗り越えることも可能であり、他人は私の考えに到達可能である。また、表明される前の考えは、表明された考え以上のものだったわけでもない。なぜなら、「私がある人に私が考えていることを言う」とすれば、そのとき、私は、私の考えについて、私の言葉が記述する以上のことを知って「はいないからである(BP1.576)。問題は(b)である。

(b)の場合、私は、「単にそれを見つけないという仕方ではなく、そもそも見つけられないことが考えられないという仕方で隠すことができる」と考えている(BP2.586)。このような隠し方をワイトゲンシュタインは「形而上学的隠匿」と呼ぶ(ibid.)。

「形而上学的隠匿」が成り立っているとすれば、「内的」世界は当人とつてのみ特権的に到達可能な世界でなくてはならない。しかし私が知らず知らず自分の内部の事象を洩らすしるしを発するというのにはありうることはないか。あるいは、そのとき私は、それはけつして私の内部の事象をもらしたしるしではないと言いたくなるかもしれない。しかし、私は自分の内部で起こったことを忘れてしまったということも、ありえないことではない(ibid.)。そのようなことがありうるかぎり、内的世界はもはや当人とつてのみ特権的に到達可能な世界とは言えない。

もし外側に顕れえない内的な心的事象が存在するとすれば、それは外的な心的事象と本質的に異なったものでなくてはならない。そのことは説明可能であるか。少なくとも、告白によってそのことを説明することはできない(BP2.703)。どうして説明できないのか。

かりに告白によって「まったく内的なもの Innerstes」(ibid.)について語られたとしよう。その告白が内的事象の独自性を説

明していると考えられるためには、告白を信用しなくてはならない。なぜなら、告白の通りの内的事象が存在するかどうかは、他人には確かめようがないからである。しかし、そのようにして内的事象について語られたとしても、外的事象との本質的な違いが説明されたことにはならない。なぜなら、その告白は、言語の誤用に基づいていたのかもしれないし、思い込みに基づいていたのかもしれないし、うそであったのかもしれないからである。これらの可能性のいずれについても、否定することはできない。このような告白による「説明」には、正しいものも誤ったものもない。当人が正しい「説明」だと思っているものが正しい説明になる。このような「説明」はもはや説明とは言えない。それゆえ、告白によって「形而上学的隠匿」を説明することはできない。

このように、「内的—外的」という比喩には、説明の及ばない「形而上学的隠匿」に陥る危険がともなう。それでも、ウィトゲンシュタインは、内的なものについて語らざるをえないと示唆している。例えば、他人を信頼していないときに、「私は彼のうちに生じていることを知らない」と言いたくなる (BP2-6023)。なぜなら、その「ふるまい (Benennen)」が予測不可能だからである (BP2-663/4)。ふるまいが予測不可能だと、なぜ内的世界について語りたくなるのか。人間ではなく、機械を考えてみればよい。ある機械が予測できない動きをすると仮定し

てみる。そのとき、私たちは機械の内部について語りたくなるのではないか。しかしその機械のメカニズムを完全に知ってしまえば、そのような内的世界について語る必要はなくなる (BP2-666)。他方、人間の「メカニズムを調べることはできないと想定されている」 (BP2-666)。それゆえに、人間は内的世界について語らざるをえない。もちろん、彼にとつては、内的世界は、実在ではなく、「文法的フィクション」 (PU307) である。つまり、彼にとつては、人間の内的世界というのは、あくまで語り方の便宜の問題にすぎず、存在論の問題ではない。このようにウィトゲンシュタインは「内的—外的」の区分を全面的に拒むわけではないが、行動主義が依拠する概念枠組みとしての「内的—外的」は斥ける<sup>(5)</sup>。

以上が行動主義に対する内在的批判と呼べるなら、これとは別に、ウィトゲンシュタインのテキストから、外在的批判も読み取れる。なぜなら、概念枠組みの問題は措いても、彼は、行動主義ではうまくいかないと考えているように思えるからである。彼は言う。

「『しかし、それでも、痛みを伴った（痛みふるまい Schmerzbenennen）と痛みを伴わない（痛みふるまい）のあいだにちがいがあつたことを君は認めるだろう。』——認めるだつて？ それ以上のちがいがあつたろうか。」 (PU304)

いかなる形の行動主義であれ、それが行動主義であるかぎり、「痛みを伴った〈痛みふるまい〉と痛みを伴わない〈痛みふるまい〉」という事実に対処できない。たしかに「痛みを伴った〈痛みふるまい〉」と「痛みを伴わない〈痛みふるまい〉」がふるまい方において異なることもありうる。その場合は、行動主義でも両者を区別できる。しかし、両者がそのふるまい方においてまったく異なることもありうる。例えば、実生活における「痛みを伴った〈痛みふるまい〉」と芝居における「痛みを伴わない〈痛みふるまい〉」がふるまい方においてまったく異なるかもしれない。そのような場合、行動主義では区別がつかない。それゆえ、ワイトゲンシュタインは行動主義に与するわけにはいかない。だからといって、彼は心身二元論にも戻らない（その理由は第四節で簡単に触れる）。ならば、彼はいかなる道を歩むのか。それが次節以降の課題である。

### 三 指示対象

ワイトゲンシュタインの場合、心的用語は何を指示するのか。心的用語が単に行動を指示するのであれば、彼は行動主義者になる。心的用語が行動の背後にある心的事象を指示するのであれば、彼は心身二元論に逆戻りする。彼によれば、心的用語は何も指示しない。「喜び」はまったく何も指示し (bezeichnen)

ない。内的なものも、外的なものも」指示しない (ZL 487, Korte II)。彼の立場は、存在論的に心的事象に関与しないたぐいのものなのである。

「痛み」についても、そのことは言える<sup>(6)</sup>。痛みは指示可能だと考えられるかもしれないが、指示できるのは、痛みの場所であって、痛みではない。「痛み」の言語ゲームの成立過程を考慮してみるなら、「痛み」が何を指示するかという問題すら成り立たないことがわかる。例えば、子供がけがをし、泣く。そして大人が子供に最初は叫びを、のちに文を教えるとしよう。

「だから、『痛み』という語は元来泣くことを意味している」と君は言うのか。——反対である。痛みの語表現は泣くこととの代わりをしているのであって、泣くことを記述しているのではない。(PU24)

つまり、「私は痛みを有する Ich habe Schmerzen」は、泣くこととの代わりをしているのであって、泣くことを記述しているのではない。それは、泣くこととの代用物であるかぎり、およそ何も記述していない。それゆえ、「私は痛みを有する」の「痛み」は、行動を指示することもなければ、内的対象を指示することもない。ただ、この説明は一人称についてしか言えない。「私は痛みを有する」は、一人称言明であるゆえに、叫びとか呻き

の代用物なのである。そしてそれゆえに、「痛み」は何も指示しない。

ワイトゲンシュタインは、泣くことや呻くことの代わりをする言明を表白 (Äußerung) と呼ぶ (BP 963, 177)。つまり、一人称の心理言明「私は痛みを有する」は表白と称される。しかし、一人称心理言明は表白としてのみ使用されるわけではない。一人称心理言明は、表白のみならず、記述にも報告にもなりうる。たしかに、「私は恐ろしい」のような「叫びは記述ではない」(PU9-189, 9-187/9)。しかし、「移行というものがあり」、「私は恐ろしい」という言葉は、叫びに近いものであることも、叫びから遠いものであることも可能である (ibid.)。また、「私は痛みを有する」という言葉は、叫びでもありうるし、何か他のものでもありうる (ibid., Glock 52)。要するに、一人称心理言明は、記述として使用することも可能なのである。

一人称心理言明は、表白であり、叫びの代わりをするというのがワイトゲンシュタインの主張であった。それが記述にもなるというのはどういふことか。話を一人称に限っても、表白の「痛い」と記述の「痛い」は意味がちがってこないか。そして「痛み」という語は、記述的に使用されるときには、感覚を指示しているのではないか。しかし彼は言う。

原初的な〈痛みふるまい〉は〈感覚ふるまい〉である。それ

は言語表現に取って代わられる。「痛み」という語は感覚を表している」といふのは、おおよそ、「私は痛みを有する」は感覚表白である」と同じことを言っている。(BP1-313)

「痛み」という語は感覚を表している」といふのは記述的用法のことであろう。だとすれば、この趣旨は、「私は痛みを有する」は感覚表白である」という原則は記述の場合も維持されるべきだということではないか。もしそう解釈できるなら、表白と記述のちがいは、次のような等式で対照できるように思える (Hacker 408)。

「表白」 「私は痛みを有する」 || 「私は痛みを有する」

「記述」 「私は痛みを有する」 || 「私は痛みを有する」  
と声を発するような状況に  
置かれている」

この等式を説明するには一対の概念が便利である。ワイトゲンシュタインには表層文法 (Oberflächengrammatik) と深層文法 (Tiefengrammatik) という一対の概念がある。語の表層文法とこの語の用法のうちで、「耳で把握することのできる部分」である (PU 664)。深層文法については明記されていないが、表層

文法の性格から推して、その語の用法のうちで耳で聞いただけでは簡単に把握できない部分が深層文法になるであろう。

両概念を使って言えば、表白としての「私は痛みを有する」と記述としての「私は痛みを有する」は、表層文法は類似しているが、深層文法が異なっているということになる。右の等式で言えば、上の辺が表層文法であり、下の辺が深層文法である。そして、この等式を認めれば、表白の「痛み」と記述の「痛み」の意味の異同を考えなくて済むのではないか。なぜなら、深層文法のレベルでは、表白の場合は無論のこと、記述の場合も、「私は痛みを有する」は表白にとどまるからである。

この論点を明確にするために、「私は痛みを有する」の代わりに、表白らしい表現「イタイイタイ」で考えてみよう。そうすると、表白と一人称記述とのちがいは左のように表されるだろう。表白としては使用されない三人称言明「彼は痛みを有する」も、一人称記述と同型のものとして処理できる。

「表白」 「イタイイタイ」

「一人称記述」 「私はイタイイタイです」

「三人称記述」 「彼はイタイイタイです」

ところで、先の等式をここに適用すれば、記述の「彼（あるいは私）」は「イタイイタイです」の意味は、「彼（あるいは私）」

は「イタイイタイ」と表白する状況に置かれている」ということになる。ただ、「イタイイタイ」と表白する状況」とはどういうことか。とりわけ、「状況」とはどういうことか。「歯ガイタイ」という表白を例に、そのことを見ておきたい。ウイトゲンシュタインに従えば、表白というのはある種の呻きの代わりである。ただ、呻きというものはそれだけで存在するわけではない。歯が痛くて呻く際には、頬を押さえるかもしれない。そして頬を押さえるにしても、食事が目の前に用意されているときに頬を押さえて食べられないのかもしれないし、玩具を前に頬を押さえて遊ばないのかもしれない。このたぐいの諸例が、歯が痛くて呻くときの「状況」である。

その呻きの代わりをするのが、「歯ガイタイ」という表白である。それゆえ、呻くときの状況は、「歯ガイタイ」という表白がなされるときも状況でもある。そして、「歯ガイタイ」と表白される状況には、頬を押さえるようなふるまいのみならず、そのふるまいに伴う諸条件、さらにはそのコンテキストも含まれるであろう。「歯ガイタイ」と表白するときには、その種の状況下に置かれているのである。

ともかく、表白と記述との関係を右のように理解すれば、「痛み」という語が何かを指示すると考える必要がなくなるのではないか。もう少し具体的に、「彼は歯に痛みを有する」と記述される場合を考えてみよう。彼は自分で「歯ガイタイ」と



表白しているかもしれないし、表白していないかもしれない。しかしいずれにしても、彼は「歯ガイタイ」と表白するような状況に置かれている。そして、(c)によって記述される事態が成り立っているとき、その事態は(d)によって記述されることが可能であり、しかも記述(c)には記述(d)以上のことは含まれていないのではないか。

(c) 「彼は歯に痛みを有する」

(d) 「彼は歯ガイタイと表白する状況に置かれている」

もし記述(c)が記述(d)に置き換えられるとすれば、「彼は歯に痛みを有する」の「痛み」は心的事象を指示する必要もないし、行動を指示する必要もないであろう。少なくともワイトゲンシュタインにとってはその必要はない。それは「実在的精神」のゆえである。<sup>(8)</sup>

#### 四 実在的精神

痛みのともなう〈痛みふるまい〉と痛みをともなわない〈痛みふるまい〉のちがいを、心身二元論者も、そして行動主義者も、「痛み」という語の指示対象の有無によって説明しようとする。つまり、両者は心的事象が真正か否かを心的用語の指示

対象の有無によって説明しようとする。心的事象が真正であることを示す指示対象とは、心身二元論者にとっては、(形而上学的に)内的世界に隠匿されたものであろうし、行動主義にとっては、ふるまいであろう。しかし心身二元論にも行動主義にも与しないワイトゲンシュタインは、心的事象が真正か否かという問題にどのように対処するのか。

ワイトゲンシュタインによれば、「私は、彼が何らかの(真正の)心的事象を有していると信じている」というのは、「意見」とか「説」を表す言明ではなく、私が彼の「魂に対する」何らかの「態度」を有することによってはじめて意味をもつ言明である (PIA 18, 40)。心身二元論や行動主義が斥けられても、それらに代わる「説」は必要とされない。必要とされるのは、「説」とか「意見」ではなく、「態度」である。この「態度」というのは、ダイヤモンドが「実在論的精神 realistic spirit」と呼ぶものである (Diamond 44)。

ダイヤモンドの話は『数学の哲学』に由来する。ワイトゲンシュタインは『数学の哲学』で、「哲学において経験論ではなくてしかも実在論であること。これこそ最も困難なことだ」と言っている (GM 6-23)。そしてこれは、F・P・ラムゼイに向けられている。ラムゼイは、経験論を採らずに実在論であろうとしているが、それは成功していないとワイトゲンシュタインは言いたいのであろう。このコメントは数学についてのもので

あるが、ダイヤモンドは、これをワイトゲンシュタインの一般的な哲学的見解とみる (Diamond 39)。ダイヤモンドによれば、「哲学において経験論ではなくても実在論であること」が「きわめて困難」なのは、fantasyに惑わされるからである (42)。そしてfantasyに惑わされるのは、形而上学的な要求があるからである (20)。fantasyと云うのは、ワイトゲンシュタイン自身の言葉では、「空回りする歯車」(UW 429, PU 271) に相当する (45)。

そもそも『探究』は『論考』の形而上学的要求を克服しようとするものである (20)。そして右の引用文は、『数学の基礎』のうちでも『探究』と同時期のものとされている。それゆえ、引用文中の「実在論」は形而上学的なものでないと理解すべきであろう。そこで、ダイヤモンドはこの「実在論」を「実在的精神」と呼ぶ。

「実在的精神」は、パークリの『ハイラスとフィロソフスの三つの対話』に、分かりやすい形で見られる (47)。この対話で、物質論者ハイラスは、実在物と Chimeras を区別するためには、知覚されることとは独立な物質が存在すると考えなくてはならないと主張する。そう考えることによって、物質によって産みだされているのが実在物であり、そうでないのが Chimeras であるという具合に区別できるといふ。これに対し、非物質論者フィロソフスは次のように答える。

あなたがあなた自身の考えに基づいてどんな方法によって事物と Chimeras を区別しようとも、明白なのは、私の考えに基づいても、同じことが成り立つだろうということです。というのも、私の思うところ、その区別は何らかの知覚された相違に基づかなくてはならないし、そして私は、あなたが知覚しているものを一つたりともあなたから奪っていないからです。(Berkeley 235)

つまり、実在物(事物)と Chimeras を区別するには、結局のところ、知覚上の相違に依らなくてはならない。だとすれば、実在物と Chimeras の区別という点について言えば、物質があってもなくても事情は同じである。この物質のように、あってもなくても同じものが、ダイヤモンドの言うfantasyである。そして、fantasyに惑わされないフィロソフスの姿勢が「実在的精神」である。

哲学において経験論を採らずに実在的精神を保つことができきわめて困難だというのは、例えば、心身問題において行動主義を採らずに実在的精神を保つことはきわめて困難だということである。なぜなら、行動主義とは一種の経験論(の徹底)であり、行動主義を採らなければ、心身二元論に舞い戻らざるをえないように思えるからである。心身二元論は実在的精神ではない。

なぜなら、心身二元論は「私的対象」という *Fantasy* に惑わされているからである。

心身二元論が行動主義とちがうのは、形而上学的に隠匿されたものの存在を認める点である。その存在は、他人に到達不能という意味で、「私的対象」と呼ばれてしかるべきであろう (PU2-207)。しかし私的対象というのは、その存在を仮定しても、何の機能も果たさない。それゆえ、私的対象は *easy* にすぎない。だとすれば、行動主義から心身二元論に戻っても事情は変わらない。行動主義によって満たされなかつた事柄は、心身二元論という形而上学によつては満たされない。心的事象をめぐる諸問題に対処するためにもめられるのは、誤つた「説」に代わる正しい「説」ではなく、「態度」という実在的精神である。

例えば、眼前の喜びは真正か否かのような問いは、「喜び」の指示対象の有無を指摘することによつて答えられるのではなく、それに対する私たちの「態度」によつて答えられる。つまり、眼前の喜びが真正か否かは、それに対する私たちの「態度」のちがいに示される。私たちは、あるときは、眼前の喜びが真正であるかのようにふるまい、あるときは、その喜びがいつわりであるかのようにふるまう。その喜びが真正であるか否かということは、私たちがいずれの仕方であるか否かということであつて、それ以上のことではない。

あるいは、「私は痛みを有する」と私がAに言つて、「そんなにひどくはならないだろう」とAが答えたとする (PU 310)。そのとき、Aは、私の「痛み表現」が誠実に使用されていると信じていることを「態度」によつて示しているのである。Aは、私の言動がふるまいにすぎないと思つてゐるわけではない (PU 304)。自然音声と身振りによつて補われたAの答え「そんなにひどくはならないだろう」は、「私は痛みを有する」とAが信じていることを証明している。態度が信念を証明する。態度のちがいが信念のちがいになる。

このように説明すると、ワイトゲンシュタインは信念について行動主義を奉じていると反論されるかもしれない。しかし、信念は心的事象ではない (BPI-715/6, Glock 623)。もし信念が心的事象であるとすれば、例えば、次の言明(e)は使用可能となるであろう。なぜなら、雨が降つてゐるという事実と私が特定の心的事象をもたないという事実が両立してしまふからである。

(e) 「雨が降つてゐるが、私は雨が降つてゐるとは信じていない。」 (LT117)

しかし言明(e)は自己撞着を起こしている。したがつて、言明(e)は使用することはできない。言明(e)が使用できないのは、信念

が心的事象ではないからではないか。だとすれば、信念についてはウイトゲンシュタインは行動主義者だという非難は当たらない。

ともかく、心的言明「私は痛みを有する」について、Aがその通りだと信じるか否かは、態度に示される。そして、その際に重要な役割を果たすのが、先に述べた「状況」である。すなわち、私が「私は痛みを有する」と言明したとして、Aが、私を介抱しようとするような態度をとるか、私のことを心配するような態度をとるか、あるいは、私に対して疑わしげな態度をとるかは、その言明が使用される状況に大きく依存する。

行動言明についてはあるが、『探究』に次のような例が挙げられている。「彼の具合はどうかね」と医者が見かねたのに対して、「彼は呻いています」と看護婦は答える。そのとき、両者は、「私たちは更に彼に痛み止めの薬を与えなくてはならない」と結論づける (PU5-179)。しかも両者は「媒概念を表明することなしに」ただちにそう結論づける (ibid.)。

前提1 「彼は呻いています」

前提2 (媒概念)

結論 「私たちは更に彼に痛み止めの薬を与えなくてはならない」

この状況では、「彼は呻いています」という行動言明について、呻きが真正か否かとか、「呻き」が何を表しているかとかは検討されることはない。ふるまいの記述から媒概念を経ずに直ちに結論が導かれ、両者は患者が痛みを有することを信じる。このように、行動言明がどのように信念に影響をおよぼすかは、その行動言明がなされる状況に依存する。とりわけ、ここでは、両者が「行動記述に担わせている役目」が重要な役割を果たしている (ibid.)。こうした「状況」は見逃されがちであるが、言語ゲームには「暗黙の前提」がつきまとうのである (ibid.)。同じことは、行動言明のみならず、「彼は痛みを有する」のような心的言明についても言えるであろう。

## 五 結語

ウイトゲンシュタインは、「内的—外的」という概念枠組みを行動主義と共有しない。また、行動主義は、たとえ可能であったとしても、痛みを伴うふるまいと痛みを伴わないふるまいのちがいが区別できない。そこで、ウイトゲンシュタインは、心的用語は何も指示しないと考えた上で、ダイヤモンドの言う「実在的精神」で、行動主義にも与せず、心身二元論にも舞い戻らない道を探っていった。たしかに、ウイトゲンシュタインは、自らの仕事は哲学的文法 (PU 371, II-222) だと任じていたのか

もしれない。しかし、心的用語の哲学的文法についての思索に際して、(アンチテーゼとしての)行動主義に対する意識が大いあずかって力があつたのではないだろうか。

注

(1) ウイトゲンシュタインのテキストについては、「探究」第一部は節番号、同第二部は節番号と頁数を、「数学の基礎」は何部の何節かを、「心理学の哲学」は巻数と節番号を、「断片」は節番号を、「最終手稿」は巻数と節番号(第一巻)あるいは頁(第二巻)を、他は頁を記した。なお、引用文中の( )は読みやすいように筆者が補ったものである。略号については、左記の文献表を参照。

(2) 支配階級が、非支配階級には学べない言語を使うことによって、自分の感情を隠すことも可能だろうし(PS&T9)、人々が、書かれた計画書を隠すことによって、自分の意図を隠すこともできる(SI169)。

(3) 原文は三人称であるが、議論の統一のために一人称に変えた(BP2586)。

(4) 規則に従うことと規則に従っていると信じるのが異なるとウイトゲンシュタインは言う(PU202)。規則だけでなく、説明についても、そのこととは言えるのではないか。説明であることと説明であると信じることは異なる、と。

(5) 以上の話は主として「心理学の哲学」に基づく。このウイトゲンシュタインの見解は、「最終手稿」に至るとさらに明確になる。第一に「形而上学的隠匿」は、単に根拠を欠くのではなく、論理的に不可能であるとされている(SZ36)。第二に、内的世界が形成せらるるを得ないことが示唆されるのではなく、明言されている。「人間を前提するかぎり、内的なものも前提」せらるるを得ない、と(SZ84)。

(6) 小論では、感覚、心理、思考を一括して心的事象として論じた。三者は必ずしも同種のものとして論じられるわけではない。例えば、「痛みは、他の感覚印象と、かなり多くの仕方で類似しており、かなり多くの仕方

で異なっている」(BP286)。小論の話は三者の相違という問題に抵触しない範囲に限定したつもりである。

(7) 「私は痛みを有する」という表現は日本語としてはたしかに不自然である。それでもあえて直訳したのは、その方が、「痛み Schmerzen」が何を指示するかという問題が扱いやすくなるからである。

(8) 反実在論的意味論のためのみならず、他我についての懐疑論と闘うために、ウイトゲンシュタインは「規準 Kriterium」概念を導入したと言われるが(Dor36)、彼の規準概念は、統一的に把握するのが容易でなく、小論で扱うことはできなかった。ただ表白がなされる「状況」について論じたところで「規準」のアイデアを多少取り入れたつもりである(BB2427(8))。

(9) この節の「痛み表現の背後に存する何かを信じている」(PU310)という表現は、けっして三元論を前提するものではなく、先に述べた「文法的フィクション」と解すべきであろう。

(10) 文脈から推して、医者と看護婦のこの種の結論は、「もし彼が叫べば、私たちは更に彼に痛み止めの薬を与えなくてはならぬ」(PU179)という仮言命題ではなく、「私たちは更に彼に痛み止めの薬を与えなくてはならぬ」という命題になろう。

#### 文献表

- Berkeley, G. *The Works Of George Berkeley* (Edinburgh 1948-57) Vol.2.  
Diamond, C. *The Realistic Spirit: Wittgenstein, Philosophy, And The Mind* (The MIT Press 1990)  
Glock, Hans-Johann, *A Wittgenstein Dictionary* (Blackwell 1996)  
Hacker, P.M.S. *Wittgenstein: Mind And Will* (Blackwell 1996)  
Koehn, J. *The Continuity Of Wittgenstein's Thought* (Cornell University 1996)  
Wittgenstein, L. *tractatus logico-philosophicus* (論理学)  
—— *The Blue Book* (BB)  
—— *Ursache und Wirkung: Intuitives Erkennen* (Philosophia vol.6 1976) (UW)  
—— *Bemerkungen über die Grundlagen der Mathematik* (数学の基礎) (GM)

- *Philosophische Untersuchungen* (『探求』 PU)
  - *Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie* (『心理学の探求』 BP)
  - *Zettel* (『断片』 ZL)
  - *Letzte Schriften über die Philosophie der Psychologie* (Blackwell 1982-92) (『最終手稿』 LS)
  - *Letters To Russell Keynes And Moore* (Oxford 1974) (LT)
- (なかにたにたかお 近畿大学非常勤講師)